

メアリ・ウルストンクラフト研究

—— イギリス十八世紀の女子教育 ——

堀 出 稔

A Study of Mary Wollstonecraft :
English Women's Education in the 18th Century

Minoru HORIDE

メアリ・ウルストンクラフトは、イギリス文学史上においては18世紀後半のロマン派詩人パーシ・ビッシュ・シェリに自由思想の影響を与えたウイリアム・ゴドウィン¹⁾の妻として登場するが、あまり多くは語られない。しかし、『フランケンシュタイン』の著者メアリ・シェリの母であり、義理の娘クレアモントとバイロンとの結婚によって、バイロンにとって義理の母にあたる女性である。女流作家として小説、童話、紀行文も書いているが、むしろ女性解放論の先駆者として多くの著作を残し、1960年から70年にかけてのアメリカのフェミニズム運動において再び脚光を浴びた。彼女の物の見方は、二つの側面、即ち生い立ち及び当時の激動する歴史の流れに影響を受けて形成されたと言える。彼女は1759年にジョン・ウルストンクラフトの第二子・長女として誕生した。父ジョンは祖父の織物業を継がず、農業経営に従事していたが、酒に溺れ家族にあたりちらす人であった。その父の家族、特に母に対する暴力とそれに抵抗もせず絶対服従する母の姿から女性の生き方を考える契機となって行ったようだ。また、当時の歴史的出来事と言えは1789年のフランス革命であり、イギリス本国では産業革命が勃発している。フランス革命の自由・平等・博愛の精神と産業革命によって大量の労働者と共に女性・児童への過重な労働をしいる社会の矛盾は、ウルストンクラフトに女性・児童の人間としての権利を考えさせる出発点となっている。この彼女の視点が当時のイギリスの女子教育に向けられ、*Thought on the Education of Daughters* と言う著書を書いたのは当然のように思われる。この論文においては、Ⅰ、ウルストンクラフトの女性のより良き在り方についての基本的な思想、Ⅱ、当時の女性の社会的状況、Ⅲ、女子寄宿学校への提言について考察し、結論としたい。

I

女性のより望ましい在り方についての彼女の考えがまとまって行くのは、二十四才の頃であろう。母が逝き、身を持ち崩した父は転々と住所を換える中、メアリは弁護士への道を進んでいた兄を頼らず妹達を助け、友人ファニー・フランシスと共に自立の道を模索し針仕事、家庭教師にも就き、小さな学校経営をも試みた。その頃ユニテリアン派の牧師でフランス革命に影響を受けたりチャード・プライスとの出会いは、彼女を急進的自由思想に向かわせる下地となり、さらにその教会に出入りしていた当時としては珍しいのだが、既に職について自立した女性達との出会いがあり、彼女等の紹介で出版業を経営するジョセフ・ジョンソンの仲間を知ることができた。その仲間には詩人のウイリアム・ブレイク、無政府主義を唱えたウイリアム・

ゴドウィン、画家のヘンリ・フューズリなどがいて、彼女に多大の影響を及ぼした。二十八才から晩年の三十八才までの短い生涯に集中的に書かれた書物には、急進的自由思想が到る所で見受けられる。三十三才の時書かれた *A Vindication of the Rights of Woman* は、女性論としては名著の一つに数えられ、その中に一貫したメアリの女性観と理想的な女性像の実現のための女子教育の在り方も論じられている。

2)

But, to render her really virtuous and useful, she must not, if she discharge her civil duties, and want, individually, the protection of civil laws; she must not be dependent on her husband's bounty for her subsistence during his life, or support after his death

まず彼女は、ほんとうに徳があり社会に役立つ女性の基本姿勢とはどのようなものかと考える。それには女性が市民としての義務を果たし、夫が活着ている間生活の糧を得るのに彼の報酬に頼らず、夫が死んでからも彼女を支えてくれる彼の残した財産に頼ってはいけないと言う。この基本姿勢は未婚・既婚を問わず女性の自立、特に経済的自立の必要性を訴えているようだ。彼女はさらに続けて、自分のものを持たない人間は自由を手にする事の困難さを述べている。

3)

Contending for the rights of woman, my main argument is built on this simple principle, that if she be not prepared by education to become the companion of man, she will stop the progress of knowledge and virtue; for truth must be common to all, or it will be inefficacious with respect to its influence on general practice.

彼女が女性の権利を主張する論拠となるものは、男女平等に教育が与えられなかったならば、女性は徳を積むことも知識を獲得する意欲も捨ててしまう。真理はすべての者に開かれていなければ、皆で何かを行う折には有効なものとはならないと言う。この文章はフランスのオタンの前司教タレイラン・ペリゴール⁴⁾への献辞として書かれたものである。タレイランが憲法改正委員会にフランスの公教育が男女双方に行われるように主張したこの報告書にメアリは感謝を示すと共に、さらに女子教育が発展するためにフランス政府に提言するように願ったのである。彼女が女子教育の重要性を訴えるのは、人間としての女性の権利に女性自身が目覚めて欲しいと思ったからであり、さらには優れた資質を持った女性には男女の差別なく、すべての職業に道が開かれていることを要望し、医学を学び看護婦だけでなく医者になることや、政治学を学び女性の慈愛心を政治に生かすことを考えた。またすべての女性の参政権について次のように述べている。

5)

I may excite laughter, by dropping a hint, which I mean to pursue, some future time, for I really think that women ought to have representatives, instead of being arbitrarily governed without having any direct share allowed them in the deliberations of government.

彼女は18世紀後半において女性の参政権を得ることができると考えてはいなかったが、未来の

ある時期と前置きしながらも政治に関与しないまま独断で支配される空しさから、女性が代表者を国会に送ることが実現することを真剣に考えていた。この彼女の願いは19世紀の女性達に受け継がれ、欧米においては20世紀初頭に実現可能になった。このように彼女が主張した女性の経済的自立、男女平等を実現するための女性の教育の重要性、自由な職業の選択、女性の政治参加といった事柄は、18世紀後半のイギリス社会にあって到底実現できるものではなく、当時の女性のほとんどすべてが前世紀からもたらされた古い社会的因習に従い、男性への絶対服従のもとに生活していたと考えられる。当然、メアリの行為は世間の非難の的となって行った。特に最初の夫ギルバート・イムレイ⁶⁾と別れ、ウィリアム・ゴドウィンとの非合法の結婚は激しい人々の批判にさらされた。しかし、今世紀においても通用する彼女の女性観は、当時の女子教育の矛盾を白日のもとにさらさざるを得なかった。

II

当時の女性を取り巻く社会状況は、従来の父権制が維持されているにもかかわらず、フランス革命の自由・平等・博愛の精神がドーバー海峡を渡ってイギリスの人々の心を捉え始めていた。また、18世紀を通して徐々に進行していた産業革命も最終段階に入って行った。産業革命によってもたらされた利潤によって、比較的余裕のある中産階級が増加した。この階級の人々は余暇を讀書で過ごす傾向があり、その中から多くの女性が筆を取るようになった。ハナ・モア⁷⁾、ファニー・バーニー⁸⁾、ジェイン・オースティンなどである。さらに女性だけのサロン「ブルーストッキング」⁹⁾ができ、女性が社会の動きを共に語る場所となって行った。この頃から19世紀に近づくにつれ、女性の書いた物には自我の主張が現れ、イギリス近代社会の萌芽を窺うことができる。しかし、たいいていの女性は上・中・下の階層を問わず昔からの女性像に従っていた。

10)

As the conduct of a woman is subservient to the public opinion, her faith in matter of religion should, for that very reason, be subject to authority. Every daughter ought to be of the same religion as her mother, and every wife to be of the same religion as her husband: they ought to abide by the decision of their fathers and husbands as confidently as by that of the church.

妻あるいは娘には父親の意見は絶対のものであった。ここでは主に中産階級の家庭の宗教に関して述べられているが、元々中産階級には17世紀清教徒革命以来、聖書の教えに忠実に生き、神を敬い、家庭では娘は母に従い、妻は夫に従う気風が受け継がれていた。しかも清教徒主義の勤勉さが女性を家事労働に縛り続けた。上流階級において形は変わっても女性の在り方は同じであった。名誉革命によって貴族階級の存続が可能となり、18世紀においても昔ながらの生活が営まれた。即ち、女性は家のために結婚し、家庭にあっては財産権の保障はなく、夫に気に入られていることを人生最大の生きがいとし、社交界にあっては決して出すぎたことをせず、夫の人間関係に彩りを添える存在でなくてはならなかった。

11)

He shall speak for himself, for thus he makes Nature address man, 'Behold these smiling innocents, whom I have graced with my fairest gifts, and commit-

ted to your protection; behold them with love and respect; treat them with tenderness and honour. They are timid and want to be defended. They are frail;

1765年、ジェームズ・フォーダイス¹²⁾が『若い女性への講話』で述べている言葉である。若い娘達の存在がまるで男性の前に現れた妖精のように考えられ、男性の保護がなければ壊れてしまいそうにか弱い人間として描かれている。メアリはこのフォーダイスの女性像を徹底して批判している。

13)

「体格を頑丈にすることは望ましくないと考えられているからだ。病気一つしない健康やありあまる活力は卑俗なものと思われているのだ。ある程度の虚弱さ、せいぜい1マイルか2マイルしか歩けない体力、ぜいたくですぐ満たされてしまう食欲の方が、弱々しさにつきものの臆病と同様、より貴婦人らしいと見なされているのだ」

貴族社会に生きた女性達は、家事労働を召使に全く任せきりにできたので毎日が有閑の日々となった。この有り余る時間を化粧と装いに費やし、夫と共に社交界に出かけ他の夫人と会話を楽しむ。話題は限られていて、パリで流行しているファッションであり休暇の過ごし方であり、男性との恋物語であり、誰かの醜聞であった。このような日々が彼女等を虚栄に走らせ、やがて精神の怠惰に陥らせた。メアリは貴族および豊かな富を蓄えた資本家からなる上流階級の女性達を最も批判の対象とした。なぜなら、彼女等が当時のイギリスを導く指導者の立場に立っていたからである。では、中流・上流でもない下層の女性はどうであっただろうか。産業革命の潤いは中流・上流には行き渡ったが、下層階級にまでは行かなかった。彼女等は日々の生活を支えるために必死で働いた。重労働は下層階級の女性ばかりか児童にまで及び、多くの悲劇を引き起こす結果となった。18世紀半ばから19世紀初頭にかけては上・中・下いづれの階層においても歴史の転換期の中で翻弄される女性の姿が浮かび上がってくるように思える。

III

さて、このような18世紀の社会状況の中で女子教育はメアリにどのように映ったのであろうか。上流階級の女子教育から見よう。

14)

「七歳ごろ、私には国語・音楽・踊り・書き方・裁縫などの科目それぞれ毎に、同時に八人の先生がついていたのを覚えています。．．．．．父は私にラテン語を学ばせたいと思いました。私の先生だった父の礼拝堂つき牧師は、あわれな鈍い男でしたが、にもかかわらず私はラテン語に上達し、学校に行っていた兄たちを追い越しました。．．．．．音楽や踊りについてはほとんど上達せず、先生がそばにいる時でなければ、リュートやハープシコードを弾くことはありませんでした。裁縫は大嫌いでした。」

当時の上流階級の女子教育の主流は、家庭教師による個人教授であった。淑女としてのたしなみを身に付けることを目標に多くの家庭教師によって教育された。しかし、中流階級ではその

ように多くの家庭教師を雇う資力はなく、16世紀からすでに存在していた女子寄宿学校に娘達を通わせた。女子寄宿学校の実態について次のように述べられている。

15)
女子寄宿学校では、歴史、地理、博物などに関する初歩的な知識を質疑応答形式でまとめたマングナル (Richimal Mangnall) の『問答』が教科書として一般的に使用されていたのであるが、この教科書による教授さえあくまでも副次的で、裁縫や刺しゅうと家政のほかフランス語、イタリア語、音楽、美術、優雅繊細な礼儀作法など、一言にしていえば淑女のたしなみが「女子専門学校」における教育内容の中心となっていたのである。

メアリがあれば嫌っていた上流階級の淑女を育成する教育が女子寄宿学校で行なわれていたのである。しかも、そのような学校に娘を競って入学させていた中流階級の人々の真意は何であったのだろうか。そこには社会における中流階級の上昇志向が存在していたのではないかと思われる。当時としては最高の指導的地位に就いていた人々は、たいていの中流階級の人々にとって憧れの的であったと思われる。メアリのようなほんの少数の人々以外には、あの輝かしい上流階級の富と権力の背後で淑女としての教育を受け、やがて墮落していった女性達の姿を見抜けなかったと言っても過言ではない。

16)
I must own it is my opinion, that the manners are too much attended to in all schools; and in the nature of things it cannot be otherwise, as the reputation of the house depends upon it, and most people can judge of them. The temper is neglected, the same lessons are taught to all, and some get a smattering of things they have not capacity ever to understand; few things are learnt thoroughly, but many follies contracted, and an immoderate fondness for dress among the rest.

どの女子寄宿学校も生徒に礼儀作法を身に付けさせることに熱心であった。それは、生徒の礼儀作法によってその家の世評を判断しようとするからである。その生徒の本当の気質そして能力は無視され、一律に教えられる。授業で教えられる浅い知識を得られればそれで十分であった。授業についていけない生徒の間には、衣服に対する節度を欠いた好みが生じてくる。メアリは、礼儀作法から始まる淑女教育によって人間としての女性の能力や才能が育てられず、ただ世間において良家のお嬢さまとして認めてもらえればよい、とする即物的な女子寄宿学校の教育方針を批判すると共に、勉強についていけない生徒達にすでに人間的墮落の徴候を感じ取って嘆かわしく思っている。また、当時の女子寄宿学校でトランプ遊びが流行したようである。この状況を1797年の新聞が次のような記事を掲載した。

17)
わが国のいくつかの寄宿学校では、女生徒たちがホイスト遊びやカシノ遊び(ともにトランプ遊びの一種)を教わっている

トランプ遊びを授業で学んでいた事実は認めがたいが、確かに女子寄宿学校の授業には「多方面の知識」と呼ばれる授業が開講されていた。その配当時間は音楽25.0%について多く、15.0%で12科目中2番目である。一番多くの時間配当のある音楽と三番目のフランス語と共に

上流階級の社交界には欠かせない科目である。

18)

Card-playing is now the constant amusement, I may say employment, of young and old, in general life. After all the fatigue of the toilet, blooming girls are set down to card-tables, and the most unpleasing passions called forth. Avarice does not wait for grey hairs and wrinkles, but marks a countenance where the loves and graces ought to revel. The hours that should be spend in improving the mind, or in innocent mirth, are thus thrown away.

確かに、当時の上流階級の間にはトランプ遊びが流行していた。それは一種の賭事であり、若い盛りの娘達が愛らしい顔に貪欲な表情を浮かべて夢中になっている姿もメアリにとって悲しむべき情景に映ったのではないだろうか。

結び

メアリが *Thought on the Education of Daughters* 及び *A Vindication of the Rights of Woman* の中でイギリス18世紀の女子教育を批判した背景には、上流階級の淑女になる教育を受けた女性達が次第に精神的に墮落して行く状況を目の当たりにして、イギリスの指導的立場に立つ彼女等に絶望したことがあったのであろう。また、彼女自身が所属する中産階級の女性達が上流階級の女性に憧れ、何から何まで模倣し、さらに女子寄宿学校に通わせて礼儀作法を学ばせ、運がよければ自分達より豊かな家に娘を嫁がせたいと思う気持ちにも失望したであろう。物事の見抜く能力を備えた彼女は、百年後において実現することになる女性の地位の向上をすでに予感していたようである。

注

- 1) William Godwin (756-1836) 英国の社会思想家・小説家。無神論を唱えた。メアリ・ウルストンクラフトの夫。
- 2) Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman* (New York:W.W.Norton & Company Inc.,1975) p.146.
- 3) Ibid., p.4.
- 4) Charles Maurice de Talleyrand-Périgord (1754-1838) フランスの司教でフランス革命に参加、破門されるが後にルイ十八世の外相となった。
- 5) Op. cit., *A Vindication of the Rights of Woman*, p.147.
- 6) Gilbert Imley アメリカ人の実業家。メアリがフランス革命中渡仏した時恋愛し、短期間であったが最初に結婚した相手。
- 7) Hannah More (1745-1833) 女流劇作家。パーク、ウォルポール、ブルーストッキングのモンタギュー夫人などと親交があった。*Percy* などの悲劇を描いた。
- 8) Frances (Fanny) Burney (1752-1840) 音楽史のパニー博士の娘で女流作家。*Evelina* や *Cecilia* などがある。
- 9) 18世紀、モンタギュー夫人が主催した女性の談話会。
- 10) Op. cit., *A Vindication of the Rights of Woman*, p.167.
- 11) Ibid., p. 93.
- 12) James Fordyce 文筆家。教育的立場から論じた著述がある。

- 13) 田口 仁久 『イギリス学校教育史』 (東京: 学芸図書株式会社、1975) p. 49.
- 14) 青山 信吉 『世界の女性史』 イギリス I (東京: 評論社、1976) p. 143.
- 15) 滝内 大三 『イングランド女子教育史』 (京都: 法律文化社、1994) p. 9.
- 16) Mary Wollstonecraft, *Thought on the Education of Daughters* (London: William Pickering, 1989) p. 22.
- 17) 『世界の女性史』 イギリス I、p. 144.
- 18) Op. cit., *Thought on the Education of Daughters*, p.45.